

- 2015/11/30 啓蒙ポスターの悲哀
- 2015/11/29 ヤミとコネの功罪
- 2015/11/28 建て替え進むキルティプル
- 2015/11/28 鉄筋ふんだん, 新築建物
- 2015/11/25 観光客、きわめて少ない
- 2015/11/23 「公式」より難儀な「非公式」封鎖
- 2015/11/22 安くて美味しく楽しい、カトマンズ中華料理
- 2015/11/21 平静に見える市内、燃料不足でも
- 2015/11/21 カトマンズの交通量、1/3~1/2
- 2015/11/20 中国からの石油輸入、価格は?
- 2015/11/18 干し柿全滅, 異常高温のため
- 2015/11/17 印英共同声明のネパール憲法言及, ネ政府抗議
- 2015/11/16 マデシ州を認めると主権喪失, チトラ・KC 副首相
- 2015/11/15 封鎖あたらめて否定, 印大使
- 2015/11/14 首都で薪販売開始, ネパール政府
- 2015/11/11 マデシ問題解決なくして供給再開なし: 印大使
- 2015/11/10 中国カードをどう使うか, オリ政権
- 2015/11/09 マイナリ副首相「タライ併合」発言に, インド激怒
- 2015/11/08 オリ首相の危険なナショナリズム
- 2015/11/06 国連人権理事会で印批判, カマル・タパ副首相
- 2015/11/06 巨大憲法国の巨大内閣
- 2015/11/05 ネ大臣の印兵私服派遣発言, 印が嚴重抗議
- 2015/11/04 インド国民射殺, ビルガンジ国境付近
- 2015/11/02 中国経由石油, ヒマラヤを越えられるか?
- 2015/11/01 副大統領にも,マオイスト元ゲリラ選出

啓蒙ポスターの悲哀

これは、この春に始められた[「プラスチック\(ビニール\)袋禁止」キャンペーン](#)のポスターだろうか？
英断だが、これは実行が難しい。



■ プラ袋禁止キャンペーン・ポスター



■ ポスターの向かいの露店

谷川昌幸(C)

2015/11/30 at 20:04 カテゴリー: [社会](#), [経済](#), [文化](#) Tagged with [ゴミ](#)

ヤミとコネの功罪

外人が外から見ると、ネパール社会の基底にはまだ「ヤミ・コネ」経済があるように思われる。といっても、暗い面ばかりでなく、そうであるからこそ、ネパール社会が突如苦境に陥っても、崩壊せず、何とか秩序を維持し存続できているのではないだろうか。たとえば、インド「非公式」経済封鎖による石油・ガス不足。

日本のような人間関係の希薄化した大衆社会だと、生活必需品の不足に人々は慌てふためき、パニックとなり、一気に過激な群衆行動に走りがちである。他方、政府も、大衆に選ばれ大衆に依存しているからこそ、大衆群集心理の恐ろしさを熟知・警戒し、何とかして大衆パニック、大衆暴動を回避しようとして焦り、一気に専制化し、強権的経済統制・社会統制に向かう。

そして、こうしていったん専制的権力を握ると、現代大衆国家は、高度に発達した情報技術を駆使して国民すべてを——たとえばマイナンバーなどで——管理し、その専制体制を永続化させる恐

れが強い。そこには、権力が見てコントロールできない「ヤミとコネ」はない。現代型専制は、すべてを見て、すべてを支配する。

ところが、ネパールは、まだそのような現代型大衆社会ではなく、「ヤミとコネ」が至る所に伏在し、必要な時には表の機能を効率よく代替する。石油・ガス不足が長期化し、先が全く見通せなくても、人々が、不平不満はあっても、決してパニックにならないのは、そのためだ。「ヤミ・コネ」経済が十分に機能しているのだ。

ガソリンは「ヤミ」ルートで大量に流れ、「コネ」を通して「ヤミ」価格で取引されている。ガソリンは現在正規価格 112 ルピー(131 円)位だが、「ヤミ」では 500 ルピー前後で売買されているようだ。

「ヤミ」ガソリンは、まずインドから相当量入っているのではないと思われる。インドからポリ容器などに入れ、あるいは車やバイクを燃料満タンにして、ネパールに入国し、それを「ヤミ」に流せば、4~5 倍のぼろ儲けとなる。やっているとするのが自然だ。マデシ反政府派がインドからの入国車両・バイクを攻撃するのにも、それなりの理由がある。

一方、ネパールに正規に入ったガソリンについては、それがどれだけ「ヤミ」に流れているかは不明。だが、役得や「コネ」で入手したガソリンを転売すれば、それだけでぼろ儲け——あるいは恩を売ること——ができるのだから、相当量あっても不思議ではあるまい。

こうした「ヤミ」ガソリンは、ミネラルウォーター用容器で受け渡されることが少なくない。1本1リットル。ネパールのプラスチック容器は薄くて弱い。すぐ破れ漏れる。こんな危険な「ヤミ」ガソリンが出回ると、新聞が報道しているように、ときには引火し惨事となる。たしかに異常な事態だが、一方、それによって相当数の車やバイクが「自転車操業」的に動いていることもまた事実である。

このように、「ヤミ・コネ」経済は、不足している物資を、危険を伴いつつも、それなりに効率的に調達し、供給・分配している。高価な「ヤミ」価格でも、それを買える人々に売るという意味では、必ずしも資本主義に反するものではない。

いまの「非公式」経済封鎖のもとで、ネパール政府が、この「ヤミ・コネ」経済以上に効率的に石油を供給分配できるかどうか？ 遺憾ながら、はなはだ疑問である。



■ かまどで調理。干し米の油揚げ(食品名?)



■ のどかではある風景(ラトナ公園前)

谷川昌幸(C)

2015/11/29 at 18:08 カテゴリー: [インド](#), [社会](#), [経済](#), [文化](#) Tagged with [コネ](#), [ヤミ](#), [石油](#), [経済封鎖](#)

[建て替え進むキルティプル](#)

カトマンズ近郊で伝統的景観がまだ奇跡的に残っているキルティプルの丘でも、震災を機に、建て替えが進み始めた。老朽化に地震被害が追い打ちをかけたためである。

地震被害は、当然ながら、古い家屋に多い。しかし、地盤の良いキルティプルの丘では、地震被害はそれほど大きくはなかった。古い家屋でも、多くは破損部分の修理で十分使用し続けられるように見えた。ところが、残念なことに、現実には修繕使用ではなく、取り壊し・建て替えがあちこちで始まった。

キルティプルは、カトマンズ市内からも空港からも40～50分。しかも、カトマンズやパタンは街並みが急速に近現代化し、伝統的文化遺産としての魅力を失いつつある。

この状況は、キルティプルにとっては、またとないチャンスであるはずなのに、気位が高いのか、この人々は、自分たちの街を観光地として売り出そうとはしていない。惜しい。

むろん、これは余所者外国人の勝手な感傷に過ぎないが、それにしても、返す返す惜しい。

▼伝統的家屋



▼崩壊家屋



▼建て替え現場／新築家屋(古い家屋の両側)



谷川昌幸(C)

2015/11/28 at 19:20 カテゴリー: [経済](#), [文化](#), [旅行](#) Tagged with [震災](#), [Kirtipur](#), [文化遺産](#), [景観](#), [歴史遺産](#)

鉄筋ふんだん, 新築建物

地震崩壊に懲りたのか, カトマンズの新築建物には, 素人目にも, ふんだんに鉄筋を使っていると思えるものが多い。とくに官庁系。

これは, キルティプル新庁舎建築現場。後方がキルティプルの丘。もともと地盤の良いところで, 先の地震でも付近の建物には大きな被害はなかった。それでも, これほど鉄筋が林立している。新建築基準ではこうなるのかな？



民間の建物は, これほどではないが, それでも以前に比べ, 基礎はしっかりしているように見える。これは, 雨後の筍のようなタメル・ジャタ地区の建築現場。



2015/11/28 at 13:30 カテゴリー: [経済](#) Tagged with [地震](#), [建設](#)

観光客、きわめて少ない

カトマンズの観光客は、見た限りでは、きわめて少ない。トレッキング客はそこそこ来ているが、旧王宮など一般的な観光地では、外国人観光客はチラホラ見かけるくらい。

11月には観光シーズンのはずだが、地震被害に加え、燃料不足が深刻化-長期化してるため、観光客に敬遠されているのだろう。観光業へのダメージが懸念される。



■旧王宮は地元民ばかり／閑散としたキルティプル

2015/11/25 at 01:20 カテゴリー: [経済](#), [旅行](#) Tagged with [経済封鎖](#), [観光](#)

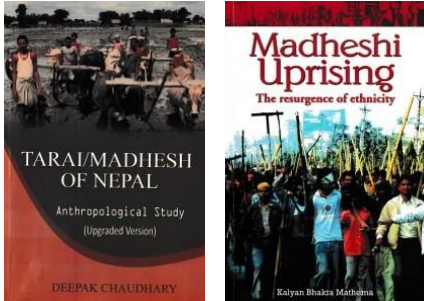
「公式」より難儀な「非公式」封鎖

タライ封鎖は「非公式」なものだそうだが、もしそうなら、それはインド政府の「公式」政策より何倍もたちが悪く、始末におえない。

もし「公式」なら、インド政府の「公式」決定により直ちに対ネ封鎖を解ける。が、もし「非公式」なら、意思決定主体が不明確で、誰が、どこで封鎖を煽っているのか、よく分からない。誰かが、どこかで封鎖を煽っているのだとすると、コントロール不能で暴動化したり、あるいはダラダラいつまでも続いたりしかねない。

さらに困ったことに、物質不足になると、儲ける輩が必ず出てくる。ガソリン 1 リットル 350 ルピー (400 円)。それでも、手に入らない。はや、ヤミ商売大繁盛。コネはカネになる。

マデシの反憲法-反政府闘争は依然激しく、11月22日にはサブタリの衝突で警察が発砲、3人死亡した。ナショナリスト強硬派オリ政府は、軍動員の準備を始めた。暴動の拡大、長期化が懸念される。



谷川昌幸(C)

2015/11/23 at 13:17 カテゴリー: [インド](#), [経済](#), [民族](#) Tagged with [マデシ](#), [経済封鎖](#)

[安くて美味しく楽しい、カトマンズ中華料理](#)

カトマンズへの中国の加速度的進出に敬意を表し、ジャタ中華街へ一人で夕食に行った。

繁盛: どの店も、外から見たところ、客がよく入り繁盛している。そのような店の一つに入った。

美しい: 店内は広くて美しい。ランタンや大きな壺など、いかにもそれらしい派手な品々で満艦飾。

青年客多数: 最も驚いたのは、客のほとんどが若い青年男女だったこと。他の店の客も街の観光客も、中国人は若者が多い。老人ばかりの日本人とは好対照。

陽気で楽しい: 中国人客は若者中心だから、陽気で、見ているだけで楽しくなる。特筆すべきは、中国人店員。男性店員もそうだが、特に女性店員は笑顔でテキパキ働き、親切で、みな美しい。

安くて美味しい: 料理は、安くて美味しい。やや難なのは、一品が多すぎて食べ切れないこと。一人で行くと、困る。多人数で卓を囲み、ワイワイ、ガヤガヤ楽しく食べるのが中華料理かもしれないが、日本の淋しい老人客用にセットメニューを用意してほしい。

前途洋々: 中華街では、食堂も衣料-雑貨店もホテルも、みな元気。道路が改修され、鉄道が延伸されれば、カトマンズへの中国進出はさらに進むだろう。それでサービスが良くなれば、大歓迎。



■美しい店内。机上チラシ注目！

谷川昌幸(C)

2015/11/22 at 12:26 カテゴリー: [経済](#), [文化](#), [中国](#) Tagged with [経済封鎖](#), [中華街](#)

平静に見える市内、燃料不足でも

石油、ガスなど、燃料不足は深刻そうだ。昨日、ジャタの食堂でモモと紅茶をたのんだら、燃料が無いので出来ないといわれ、コーラとパンを勧められた。バス、とりわけ郊外路線では、前回紹介したように、車内に入りきれない乗客が大勢、屋根の上に乗っている。雨期でないのが、せめてもの救いだ。

しかし、そうした状況でも、人びとはいたって平静だ。少なくとも、外からは、そう見える。日本ならパニックになり社会不安、政治不安は避けられそうにないのに、ネパールではそうはならない。人びとには、まだ危機に対する伝統的な対処能力が残っているのだろう。

日本では、石油危機のとき、トイレtpーパーが無くなるというウワサで、都市住民がパニックになり、買い占めに走った。トイレtpーパーなんかなくても、どうということはないのに、近現代的な市民は、そうした柔軟な思考ができない。環境変化に極めて弱い。現代の専制や独裁は、そうしたパニック心理から生まれる。

イザとなれば、食うことくらい何とかなるさ、といった柔軟な思考が、いま求められている。ネパールから学ぶことは少なくない。



■ラトナ公園・警察署前

谷川昌幸(C)

2015/11/21 at 17:35 カテゴリー: [ネパール](#), [社会](#), [経済](#), [文化](#) Tagged with [パニック](#), [独裁](#), [経済封鎖](#), [大衆社会](#), [専制](#)

カトマンズの交通量、1/3~1/2

11月19日深夜、カトマンズ着。翌日、さっそく市内を見に行っただ。ラトナ公園周辺など、市中心部の交通量は、燃料不足のため、見たところ通常の1/3~1/2。車もバイクもスイスイ走っていた。排ガスが少なく歩くのに最適。

電動小型乗り合い三輪車(ツクツク)は、電動だからか、そこそこ走っていた。15ルピーと、安い。しかも、愛想のよい女性運転手が多い。石油不足は悪いことばかりではない。

その一方、人びとが移動に難儀していることは、屋根の上に乗客を乗せたバスが多数見られたことでも明らか。いつもだと、屋根に乗客を乗せたバスなど、市内ではほとんど見られない。やはり、燃料不足のため、バスの運行が大幅に間引かれているのだろう。

▼屋根上のバス乗客



■シンダーバー前。上方は最新ソーラー照明。



■バスパーク。近郊・郊外行のほぼすべてのバス屋根上には乗客。



■ バグバザール。後方道路に車ほとんどなし。

谷川昌幸(C)

2015/11/21 at 01:58 カテゴリー: [その他](#), [社会](#), [経済](#) Tagged with [バス](#), [石油](#), [経済封鎖](#), [交通](#)

中国からの石油輸入、価格は？

中国は、ネパール国内石油需要の 1/3 を中国から輸出することに合意しているが、問題は価格。

11 月 16 日、GM. プン通商供給大臣がオリ首相書簡を携え訪中、価格交渉をした。中国側は市場価格での石油供給を約束したというが、ここには輸送費や精製費は含まれていないという。

中国側は、どこから、どのような手段で運ぶのだろうか？ トラック、それとも鉄道？ あるいは、精製とは？ これらのことは、専門外でよく分からないが、おそらく安くはないのだろう。

それでも、もしそうした課題が解決され、覚書通り中国から石油が供給されるなら、ネパール国内の石油燃料の 1/3 は中国経由となる。また、そうなれば、他の物質もいま以上に大量に入り始めるだろう。

これは大きい。経済的にはむろんのこと、政治的にも文化的にも。



■シンハダーバー(政府庁舎)前の給油待ち車両の列;給油所は前方バドラカリ寺院前。

谷川昌幸(C)

2015/11/20 at 05:10 カテゴリー: [経済](#), [外交](#), [中国](#) Tagged with [タイ](#), [石油](#), [経済封鎖](#)

干し柿全滅, 異常高温のため

柿大豊作で喜び, 干し柿をつくろうとしたが, カビが生え, ハエがたかり, 全滅! 高温続きのためらしい。



■カビが生えハエがたかる／ハチもくる／まだ数珠なりの柿(11月17日)

私のような素人の日曜農家だけでなく, 村の専門農家が熱湯殺菌, アルコール消毒, 硫黄蒸し, その他それぞれの秘伝を駆使して干した柿も, ほぼ全滅だそうだ。異常気象と言わざるをえない。

今日, 11月17日も, 20度以上。柿はまだまだたくさん木に残っている。山も豊作なのか, サルもクマもカラスも里には下りてこない。残った柿は, もったいないが, 熟して落ちるに任せるしかない。

今年がこれでは, 来年は凶作だろう。異常気象に苦しめられるのは, 人間よりもむしろ, 野の草木や動物たちだ。

【参照】[柿、未曾有の大豊作の不気味](#)

谷川昌幸(C)

2015/11/18 at 10:15 カテゴリー: [自然](#), [農業](#) Tagged with [温暖化](#)

印英共同声明のネパール憲法言及，ネ政府抗議

訪英したインドのモディ首相が11月12日、キャメロン首相と会談し、共同声明を出したが、その中にネパール憲法への言及があったため、ネパール政府が強く反発、外務省が抗議声明を出した。

* 新華社配信。“Nepal objects to India–Britain joint statement,” *Nepal National*, 16 Nov.; “Nepal responds to UK–India joint statement,” *globaltimes.cn*, 16 Nov.

1. 印英共同声明の関係部分

「両国[印英]首相は、ネパールが残された諸問題を解決し、政治的安定と経済成長を推進できるような、永続的にして包摂的な憲法をつくることの重要性を強調した。」

2. ネパール外務省の公式発表[要旨]

「ネパールは、約8年間の厳しい民主化努力ののち、選挙により成立した制憲議会において新しい民主的にして包摂的な憲法を公布することができた。」

「ネパールは、平和・安定・繁栄のために国際社会が提供してくれた支援と善意に敬意を表する。しかしながら、憲法制定は一国の国内問題であり、ネパールは、その国内問題にネパール自身で対処できる、と強く認識している。」

3. ネパール外務省筋の抗議

この件について、ネパール外務省筋は、新華社の取材に次のように述べた。

「ネパールは、主権国家として新憲法を採択したのであり、他のどの国であれ、この新憲法の内容について、あれこれ指示すべきではないと信じている。われわれの国内問題への、いかなる外国の外からの介入をも許容できない。」

4. ナショナリズムの高揚

ネパールでは、マデシ反憲法闘争の長期化とともに、憲法を制定した諸勢力の側のナショナリズムが高揚している。

たしかに憲法制定支援と称して自分たちの作りたい憲法をネパールに押し付けてきた西洋を中心とする国際社会の態度は、ネパールの自尊心を著しく傷つけるものであった。一外国人にすぎない私ですらいくども腹が立ったのだから、誇り高きネパール知識人の多くが不満と怒りを鬱積させてきたであろうことは、容易に想像がつく。

そうした不満と怒りが、いまナショナリズムの高揚という形で噴出し始めたのではないだろうか？もしそうだとすると、これは危険な兆候とみてよいであろう。

▼ネパール外務省 HP



■外務大臣はナショナリズムの旗手カマル・タパ(写真右)

谷川昌幸(C)

2015/11/17 at 03:54 カテゴリー: [インド](#), [ネパール](#), [外交](#), [憲法](#) Tagged with [カマル・タパ](#), [ナショナリズム](#), [モディ](#)

[マデシ州を認めると主権喪失, チトラ・KC 副首相](#)

[マンデル無任所大臣の印私服兵派遣発言\(11月2日\)](#)や [CP・マイナリ副首相の印タライ併合発言\(11月7日\)](#)が印政府の激怒を買ったばかりだというのに、今度はチトラ・バハドウル・KC 副首相が、11月13日のテレビ・インタビューで、同趣旨の発言をした。インド紙「The Hindu」が大きく報道している。

チトラ・KC 副首相は、国民人民戦線から出ている。副首相は6人もいるとはいえ、発言はヒラ大臣よりも格段に重い。マンデル大臣、マイナリ副首相に続く3人目、しかもマデシ問題の本質を突く、あけすけの本音発言だ。これは重大。以下、発言要旨。

憲法規定の州区画を改め、タライだけの州をつくると、ネパールは主権を失うことになる。「南部のタライ平原・丘陵地・山地の三地域は、相互に依存しており、そこに手を付けるべきではない。」

「マデシ諸党が東部のジャパ、モラン、スンサリ、西部のカイラリとカンチャンプルを彼らの州に組み入れよと要求している理由が、一点の疑問もないほど明白になった。いま、ネパールは、ネ印国境封鎖のため、苦難に直面している。……このことこそ、タライを他の地域から分離することが、この国にとって破滅的となることを、何よりもよく物語っている。」

「ネパール人民は、その希望に沿って憲法を公布したため、経済封鎖をもって処罰されている。」マデシ問題は、ネパールの内政問題であり、外国の助けは不要だ。

* “Nepal to lose sovereignty if Terai is separated: Deputy PM,” *The Hindu*, 14 Nov. 2015



■ 国民人民戦線

タライのマデシやタルーが、長年にわたり、カトマンズの封建王政ないしパルバテ・ヒンドゥー高位カースト寡頭政により支配・搾取されてきたことは、疑う余地のない歴史的事実。この封建支配体制は、マオイスト人民戦争により打倒され、包摂民主主義を理念とする人民主権の連邦共和国が成立した。マデシやタルーは、これにより伝統的な支配・搾取から解放されると期待した。

ところが、彼らによると、新体制は、王制を否定したものの、カトマンズ中心の諸勢力がタライを支配し抑圧する構造はそのまま温存し、それを新憲法に書き込んだ。すなわち、タライを分断し、タライの自治を否定し、タライをカトマンズ中心の支配諸勢力に隷従させ続けることにした。

タライは、タライだけで1州ないし2州を要求しているのに、カトマンズ諸勢力はタライを縦にいくつかに分断し、北側の丘陵地と組み合わせ、そうすることによってタライを丘陵地諸勢力に隷属させ続けようとしている、というのだ。

このタライ住民の主張には、相当の根拠がある。伝統的上位カーストは、タライ諸民族に自治権を与えることを恐れている。タライ諸民族中心の州ができると、州ごとインドに接近し、カトマンズ中央権力のコントロールが効かなくなる。

チトラ・KC 副首相の危惧する通りだ。ネパール国家主権は危うくなる。国家主権、国民主権を重視するなら、タライ州は危険であり、認められない。これに対し、民族自治を重視するなら、タライ州は認められねばならない。

この二律背反は、ネパール憲法そのものに内在する矛盾だ。国民の統一と主権を訴えるカトマンズ政府側も、民族州の自治を求めるマデシやタルーも、同じくらいの正当性をもって憲法に訴えることができる。これは難しい。

谷川昌幸(C)

2015/11/16 at 21:30 カテゴリー: [憲法](#), [民族](#) Tagged with [タライ](#), [マデシ](#), [Chitra Bahadur KC](#), [連邦制](#), [国民人民戦線](#)

[封鎖あたためて否定、印大使](#)

ライ駐ネ印大使が11月12日、「ネパールテレビ」インタビューにおいて、インドは自国内では封鎖をしていないと改めて断言し、通過障害はもっぱらネパール側の抗議活動の結果だ、と主張した。

▼”No blockade on Nepal-India border, supplies to resume soon, says envoy Ranjit Rae,” *Nepal National*, 13 Nov.

ライ大使の議論は極めて明快、さすが形式論理国の大使、インド側の言い分にも耳を傾ける必要がありそうだ。以下、インタビュー要旨。

「タライの人々は、3か月にわたって抗議活動を続けてきたが、解決を見ず、そのため抗議方法が変化した。「反対派は主要印ネ道路のピケを始め、こうして、いわゆる封鎖が始まったのだ。」

「インド人がタライの抗議運動をあおっているという非難は、全くの的外れだ。タライの人々が、あちこちで抗議活動をしている。これは、彼らが彼らの考えで始めた国内の抗議活動であり、最善の解決策は、対話を通して彼らの要求にこたえていくことだと考えている。」

「憲法は基本的文書である。ネパール人民の期待も大きかった。ところが、ある社会の人々が制憲過程への十分な関与を認められていないと感じ、不安を募らせ、抗議を始めた。彼らの訴える諸問題を解決することこそが、平和と秩序への唯一の解決策であり、だからこそ、それらの諸問題は解決されるべきであり、解決されるであろうと、われわれは楽観している。」

「ネパールが憲法を持つことになれば、それは偉大な成果だと思う。取り残されたと感じている人々がすべて、その憲法の中に包摂されることを希望する。」

「この問題は本質的に政治的なものだから、政治的諸問題が解決され、反対派が抗議の形を変え、国境通過道路のピケをやめるなら、供給は正常化すると確信している。インド政府としては、他の国境通過道路による迂回輸送と他の供給基地からの石油輸送に全力をあげているが、対ネ交易の70%はビルガンジ経由であり、まさにいま、ここが封鎖されているのである。」

「ネ印関係改善の環境を作り出すための努力は惜しまないが、反印キャンペーンは拒否する。」ラクサウル・ビルガンジ国境付近の抗議活動が続く限り、供給は妨害され続けるだろう。

以上が、ライ大使インタビュー要旨。大使によれば、インド側には何百台ものトラックがネパール入国を待っているという。事実とすれば、ネパール側での攻撃を恐れ待機しているとも考えられる。あるいは、カトマンズ諸勢力が、ナショナリズムによる国論統一とマデシ攻撃のため、インドの内政干渉を言い立て利用している可能性もある。

ネパール紛争は、利害関係が極めて複雑。理解には多角的アプローチが不可欠だ。



■ 在ネ印大使館 HP

2015/11/15 at 23:48 カテゴリー: [インド](#), [ネパール](#), [経済](#), [外交](#), [憲法](#), [民族](#) Tagged with [マデシ](#), [経済封鎖](#)

首都で薪販売開始, ネパール政府

ネパール政府が、燃料不足に対処するため、薪の販売を始めるらしい。

森林・土壌保全省が11月10日、「ネパール材木会社(TCN)」に対し、バラ郡、ナワルパラシ郡などの森から燃料用木材を集め、都市部に運び、とりあえずカトマンズとパタンで11月13日から販売を始めるように指示した。トラック215台分だという。

カトマンズやパタンは、今では生活様式は東京や大阪などと大差なく、中心部の人口密度はむしろ日本より高いはずだ。そんな大都市のど真ん中で、市民やレストランが薪で煮炊きする。あるいは、金ぴか高級マンションの窓から、薪ストーブの煙突がのぞき、煙をもくもく吐き出す。超近代的で絵にはなるだろうが、大丈夫かな？

ネパールの家庭燃料は、全国では薪64%、LPG21%(2011年度)だそうだ。地方は、まだまだ薪使用が多い。だから薪調達が可能というわけではない。

しかし、薪は16ルピー/Kgだそうだ。これは、とんでもない高値ではないか？ 森林省は、地域の共有林の枯木や枯枝を集めて都市部へ運び、売れ、と指示しているが、素人が考えても、そんなことで間に合うはずがない。

すぐに始まるであろうのは、地方住民の使うはずの薪を高値で横取りし、都市部住民に売り、儲けること。もう一つは、森林を伐採し、はげ山化、砂漠化に拍車をかけること。

いずれにせよ、石油漬け、ガス依存になってしまった都市生活の危機を代替薪で救うのは、中長期的にはむろんのこと、短期的にも無理である。

また、中国からの石油やガスの輸入も、悪路と冬季に入ると考えると、あまり期待はできない。やはり、何とか早く、マデシ紛争を解決し、ビルガンジ国境通過を正常化する以外に方法はあるまい。

森林省は「ネパール石油会社」に対し、薪運送トラックへの石油優先供給を要請したそうだ。

[追加](11月15日)

薪価格: 15ルピー/Kg, 1家族110Kgまで(15日報道)。

私自身、高度成長以前の日本の村で、薪を煮炊きや風呂沸かしや暖房に使っていたが、すべて自宅裏の山から採取してきた薪。原料は、造林の際、間引いた木や雑木であり、加工用木材としての価値はほぼゼロ。

ネパールの薪使用は、林業と両立していた日本のそれとは、かなり異なるようだ。報道写真を見ると、カトマンズに運び込まれている薪は、どうみても枯木や枯枝ではない。伐採がいつかはわからないが、薪用に販売されている材木は、建物や家具などに使用可能な立派な大木である。こんな大木を燃やしてしまってよいのか？ そんなことをすれば、ネパールの森林がまた減るのではないか？ 心が痛む。

そもそもカトマンズの薪価格は高い。煮炊きならまだしも、暖房に使ったら、すぐなくなってしまうだろう。

(参照) Kathmandu Post,6,11,12 & 15 Nov; time.com,11 Nov.



■カカニの森林伐採(谷川, 2002)

谷川昌幸(C)

2015/11/14 at 11:13 カテゴリー: [経済](#) Tagged with [マデシ](#), [石油](#), [経済封鎖](#), [森林](#)

[マデシ問題解決なくして供給再開なし:印大使](#)

ライ駐ネ印大使が11月10日、カトマンズ記者クラブにおいて、ネパール政府の封鎖解除要請を一蹴した(Republica, 11 Nov)。

オリ内閣は11月9日、インド政府に物資供給を要請する特別決議を採択した(決議原文未見)。ネパール政府の正式の公式要請。ところが、ライ大使は、そのような要請は聞いていないとして、「ネパール政府と反政府諸党とが合意に達するまで危機は続く」と断言した。

ライ大使によれば、ビルガンジ経由はマデシ問題が解決しなければ再開できないし、また他の経路に迂回させることも非現実的だ。

大使「ネパールの主要消費地に向け十分な燃料を供給できるのは、ラクサウル[ビルガンジ]基地からだ。少なくとも80～85%の燃料は、ラクサウル基地から供給される。……ラクサウル基地からの供給がとまれば、ネパールは自ずと厳しい物資不足に陥るであろう。」

大使「反政府諸政党との対話を通して問題を解決する以外に、解決策はない。」



■ 在ネ印大使館 HP

ここでライ大使のいうマデシ問題の解決とは、要するに、マデシの要求に沿う憲法改正である。直接引用ではないが、上掲リパブリカ紙は大使の説明をこうまとめている。

「ライ大使はこう述べた。インド側は、ネパールの主要政党に対し、すべての社会諸集団が一つの国民としての憲章をもつことができたと確信できるような、そのような憲法をつくるよう一貫して提案してきた。」

この記事が正しいなら、インド側は、オリ内閣の物資供給要請特別決議を無視し、高飛車に憲法改正を要求していることになる。明白な内政干渉。このインドの宗主国的対応に、ネパールの左右ナショナリスト連立政権は、どう対処するのか？

さらに中国に傾斜するのか？ すでに吉隆には大量のネパール向け物資が集積されつつあるそうだが、ラスワガディ経由でリンゴは入ってきたそうだが、石油等の他の生活必需物資の本格供給はいつ始まるのだろうか？



■「インド石油」ラクサウル基地と「ネパール石油」アラムクガンジ基地 (Google)。両基地間パイプライン印ネ協定締結済。

谷川昌幸 (C)

2015/11/11 at 17:59 カテゴリー: [インド](#), [ネパール](#), [経済](#), [憲法](#), [中国](#) Tagged with [ナショナリズム](#), [マデシ](#), [Oil](#), [地政学](#)

中国カードをどう使うか, オリ政権

オリ政権が、新憲法に反対するマデシやそのマデシを支援するインドとの交渉に、「中国カード」を使用していることは明白だが、有効性が増せば増すほど、パワーゲームにおけるカードの使用は難しくなり、危険だ。ネパールは、手にした「中国カード」をどう使うべきか？

この観点から興味深いのが、11月7日付「ニューヨークタイムズ」に掲載された「カトマンズポスト」A・ウパダヤ編集長の「ネパール、竜と象の間で」という記事。概要は以下の通り(補足説明適宜追加)。



Akhilesh Upadhyay (同氏ツイッター)

▼ネパール、竜と象の間で(NYT, 7 Nov)

ネパールの新憲法は、長らく待ち望まれていたものだが、いざ制定公布されると、それに不満をもつタライの人々が印ネ国境付近で道路封鎖など激しい反対運動を始め、しかもそれを自国への波及を恐れるインドが支援し「非公式」経済封鎖を始めてしまった。

インドの経済封鎖は過酷なものであり、石油は底をつき、燃料不足で移動は困難となり、主要工場は休止、観光業は大打撃を受けている。

「このデリーの過酷な禁輸や力の行使は、大多数のネパール人にとって耐えがたいものとなった。」しかしインドにとって、「ネパールの政府は以前から操作の対象であった」。今回、「インドは、インドと密接な関係にあるマデシの人々を、カトマンズの権力に対するデリーの戦略的手段として利用できると考え」、彼らの道路封鎖を支援しているのである。

このマデシの反憲法道路封鎖闘争へのインドの経済封鎖による支援は、「ネパールの主権に対する重大な侵害」である。

「耐えがたい屈辱を受けたネパール政府は、北の隣国との交易は(少なくとも短期的には)南の隣国との交易にとって代えられるほどのものではないと知りつつも、その交易路の中国への拡大を図りつつある。……この2週間ほど前、ネパールは中国との間で石油取引協定に調印した。40年間にわたる国有インド石油会社の独占に終止符を打つものであり、ネパールの戦略的勝利である。11月5日には、中国とネパールは交易路を7か所追加開通させることにも合意した。」

「交易路を中国に伸ばすことにより、ネパールはインドと取引するに必要なカードを持ったことになる。」

他方、中国からしても、ネパールの共産主義・毛沢東主義諸政党とは良好な関係にあるし、ネパール国内のチベット難民社会の監視にも関心があるので、ネパールとの関係強化は望ましい。さらに経済的な観点からも、ネパールは重要となってきた。

「北京は、ネパールの憲法制定を強力に支援してきた。ネパールが安定すれば、中国自身よりも大きな人口をもつ巨大な南アジア市場へとつながるヒマラヤ縦断鉄道を完成させることができるからだ。」

中国もネパールを必要としている。そのことにインドは十分注意すべきだ。「インドの強硬戦術は、カトマンズを北京に接近させるだけだ。今週、ネパールは中国からトラック数台分の石油を受け取った。少量だが、象徴的意味は大きい。」

こうしてネパールは「中国カード」を手に入れたが、インドも中国もネパールとは比較にならないくらい巨大な強国であり、ネパールとしては、その使用には十分注意していなければならない。

「これまでネパールには頼るべきものがほとんどなかったので、強力な隣国の要求にはたいてい屈服せざるをえなかった。しかし、今回、ネパールは、インドのライバルたる中国に接近することにより、インドの干渉に対抗しようとしてきた。これは、ネパールとしてはスマートな[賢い]動きではあるが、強力な二大隣国の間でそうした動きをすることには十分な注意が必要である。」

以上が、ウパダヤ編集長記事の概要である。たしかに、地政学的に、ネパールが新たな地平に立つことになったのは、事実であろう。では、その新たな状況の下で、ネパールは内政・外交をどう進めていけばよいのであろうか？

著者は、インドに対する「中国カード」の使用はスマートだといいつつも、使用には用心せよ、と警告している。では、どう用心するのか？

著者は、結びにおいて、ネパール政府は「自国の人民の要求、すなわち何世代にもわたり訴えられてきたマデシの人々の要求」に応えるべきだ、と述べている。

しかしながら、「マデシ自治州」を中心とするマデシの諸要求に応えられないからこそ、カトマンズ政府は力による新憲法施行を図り、対抗してマデシは「インド・カード」を持ち出し、そして、その「インド・カード」に今度は政府が対抗して「中国カード」持ち出したのではないのか？ この状況で「中国カード」をどう使うのがスマートなのか？

「中国カード」が十分に使えなかった頃は、「インド・カード」が切り札となり、ネパール内紛は決着した。が、ジョーカーが2枚となったいま、「インド・カード」は最後の切り札ではなくなった。この新しい状況で、ネパール内紛はどのようにして決着させられるのか？ これは難しい。タライ内乱とならなければよいが。

谷川昌幸(C)

2015/11/10 at 20:31 カテゴリー: [インド](#), [ネパール](#), [外交](#), [憲法](#), [民族](#), [中国](#) Tagged with [タライ](#), [マデシ](#), [連邦制](#)

[マイナリ副首相「タライ併合」発言に、インド激怒](#)

1. 印大使館プレスリリース

CP・マイナリ副首相兼女性・子供・社会福祉大臣(ネパール共産党マルクス・レーニン派)の発言に、インドが激怒、在ネ印大使館が非難声明を発表した。

▼インド大使館プレスリリース(2015年11月8日, 印大使館 HP)[要旨]

当大使館は、CP・マイナリ副首相が2015年11月7日、カトマンズの記者クラブで行ったインドに関する発言につき、強く非難する。副首相発言は、根拠のない悪意に満ちたものであり、ネパールが直面している真の問題から目を逸らさせるものである。

インドの願いは、ネパールの平和、安定、繁栄のみ。インドは、ネパールの内政問題が政治的対話と和解により解決されることを願っている。そのためのあらゆる努力を、インドは支援する。

2. マイナリ副首相のインド非難発言

インドをこれほど怒らせたのは、カトマンズ記者クラブでのマイナリ副首相の11月7日の発言。「カトマンズポスト」(11月7日)が伝えた。

▼インドの狙いは封鎖によるタライ併合:マイナリ副首相(Kathmandu Post, 7 Nov)[要旨]

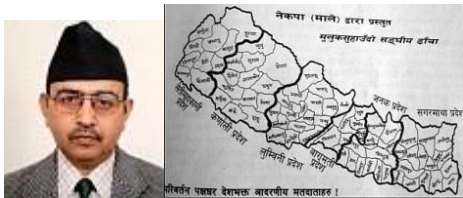
CP・マイナリ副首相は、インドによる非公式封鎖はネパールを解体しインド領に併合するための第一歩だ、と主張した。

マイナリ副首相は、タライ地方分割に関するRK・ヤダブ前研究分析局(RAW)局長の主張について、インドは釈明していない、と語った。インデラ・ガンディー首相のときRAW局長だったヤダブは、その著書において、インドはタライ地方の分離を計画していた、と述べている。インドは、封鎖によりその計画をいま実行しつつある、とマイナリ副首相は主張した。

マイナリ副首相はまた、マデッシュ州要求には、どのような犠牲を払おうが応じられない、と語った。要求されているカイラリ、カンチャンプル、スンサリ、モラン、ジャパの諸郡は、マデッシュ州には含まれない、と彼は語った。

このカトマンズポスト記事は、マイナリ副首相発言の直接引用ではないが、他紙も報道しており、ほぼこの趣旨の発言があったのだろう。

インド国境沿いのタライ・マデッシュ地方の分割・インド併合は、巷ではしばしば議論されているが、副首相が記者会見で述べたとなると、インドとしては見過ごすわけにはいかなかったに違いない。



■マイナリ副首相とタライ分割 6 州案(同氏 FB, 2013 年 10 月 14 日)

3. プラチャンダ議長の反印プロパガンダ

オリ政権は、前回も述べたように、反印ナショナリストと見られている。オリ首相は、「もしインドがネパールを支配しようとするなら、われわれは戦う覚悟をすべきだ」などと発言しているし、またオリ政権を生み出し支えている UCPN のプラチャンダ議長も、「非公式封鎖」には立ち上がる用意ができていと述べている。

このうち、特にプラチャンダ議長は、マオイスト人民戦争を勝利に導いた勇敢な英雄であり、あけっぴろげの庶民受けする雄弁家でもあり、影響力が強い。その彼が、「ニルマル・ラマ記念アカデミー」総会(11 月 8 日)において、次のように述べている。

「ネパールの人々は、飢えに苦しめられ、交通手段を奪われ、燃料ガスもない。医薬供給がなく、死ななければならない。すべて、ネパールが自ら憲法を制定公布したからなのか？ 隣国は、これに対し、どのような態度をとっているのか？ この非人道的な国境封鎖の背後には、どのような理由があるのか？」



■習主席とプラチャンダ議長(新華社)

4. 反印プロパガンダの甘えは許されるか？

ネパールには、以前から強い反印感情があり、激しいインド非難もことあるごとに繰り返されてきた。いわば、慣れっこ。

しかし、ネパールの状況は、ネパールの民主化と中国の接近により、以前とは大きく変化してきた。これまでのように、内政に問題があれば、インドを悪者に仕立て不満を外に逸らす、あるいは保護

国の悪口を言いつつ保護国に依存する、といった甘えの手法は、もはや通用しなくなりつつあるのではないだろうか？ このことについては、次回、検討してみることにする。



■ S.H. Shrestha, Nepal in Maps, 2005, p.99

谷川昌幸(C)

2015/11/09 at 18:22 カテゴリー: [インド](#), [憲法](#), [民族](#) Tagged with [マデシ](#), [CP Mainali](#), [連邦制](#), [Oli](#), [Prachanda](#), [内政干渉](#)

[オリ首相の危険なナショナリズム](#)

オリ政権は、UML, UCPN, RPP-N のナショナリスト3党を基盤としており、もともと対外強硬路線に向かいがちだ。

エースはなんといっても、カマル・タパ副首相兼外相。いち早くニューデリーに乗り込み、モディ首相に直談判したし、11月2日には[ジュネーブの UNHRC 会議でインドの対ネ非公式経済封鎖を非難](#)した。しかし、彼はもともと王制派ナショナリストなので、そうした発言は予想されたことであつたし、また保守主義者なので発言には良識的抑制が利いていた。

これに対し、オリ首相(UML)のナショナリズムは民主主義的で、よりストレート、あるいは報道が事実とするなら、かなり荒っぽく、それだけに、より危険である。オリ首相は11月6日、「ネパール記者連盟(FNJ)」と「ネパール・タルン・ダル(NC 青年組織)」のメンバーと相次いで会い、次のように語ったと報道されている。



■オリ首相(内閣府 HP)

「ネパール新憲法はネパール人がネパール人のために制定公布したのであり、他の誰への加害も意図したものではない。」また「われわれは隣国インドに対し何ら悪意を持っていないし、その利益を害しようとも思っていない。」(Himalayan, 1 Nov)

ところが、インドはネパールに対し意図的に経済封鎖をし、ネパールを「非人道的に扱っている」。インド政府は、腐った魚や野菜を送りつけ、封鎖をしていないことを証明しようとしたが、ガスは供

給しない。戦時中であっても、食料などは人道的観点から輸送されるのに、いまはそうではない。インドの対ネ封鎖は、「戦争より非人間的」だ。(Himalayan & Republica, 6 Nov)

またインドは、ジュネーブの UNHRC 会議において、人民戦争期の人権問題を蒸し返した。「少し前、隣国指導者の一人が、インドはネパールに対しその気概を示すだろう、と公に警告した。……いま、彼らは10年も前の問題を掘り出してきた。」たしかに「われわれは、過去に戦争の苦難に直面したが、いつまでも戦争を続けることはできない、と思い知った。そこで、われわれは平和プロセスを開始したのだ。」「以前は戦っていた諸党が、いまでは一緒になり、与党、野党にかかわらず、民主的・平和的な改革を押し進めている。」(Zee News, 6 Nov)

「隣国がわれわれの目を覚ましてくれた。私は、わが国の独立、尊厳、国民的統一を堅持し、この国を今の危機から救い出す努力を惜しまない。」(Republica, 6 Nov)

このように述べたうえで、オリ首相は、国民とメディアに二つの要請をする。

インドの対ネ経済封鎖は、「別の道を求めるチャンス」でもある。政府はトロリーバス復活を考えるし、国民は電気自動車や電気ヒーターを買い使ってほしい。[一日十数時間停電では？]

また、メディアは、国家の統一、主権、独立を損なうような記事を書くべきではない。自由はアナーキーではない。しかるに、このところ、表現の自由を名目に、国家を脅かすような活動が目につく。この国は国民的統一を必要としているのであり、国民とメディアには成熟した責任ある態度が求められている。

オリ首相は、以上のようなことを語ったと、ネパールとインドのメディアは報道している。もしこれらの報道が事実から大きく外れていないのなら、オリ首相は、カマル・タパ副首相以上に強硬なナショナリストということになる。



■ UML 第9回党大会(同党 HP)

もともとネパール新憲法は、きわめて国民主義的、愛国主義的である。第5条は「国益」を定めており、「国益」侵害は連邦法により処罰される。ネパール国民の独立、主権、領土的統一、国民性、尊厳などは、「国益」として法の処罰をもって守られる。したがって、オリ首相の「国益」を理由とした報道自粛要請も、単なるお願いではなく、法的な根拠があるわけだ。

ナショナリズムは、民主的であればあるほど、危険だ。11月7日には、プラチャンダ UCPN 議長が、プトワルでの記者会見で、「もしインドがわれわれを支配しようとするなら、そのような抑圧とはい

つでも戦う覚悟をすべきだ」と檄を飛ばした(Kathmandu Post, 7 Nov)。UMLもUCPNも、いずれ劣らず強硬な民主主義的ナショナリストだ。

これは危ない。愛国心をあおられ、激高した人々が、不測の事態を引き起こさなければよいが。

谷川昌幸(C)

2015/11/08 at 08:39 カテゴリー: [インド](#), [憲法](#), [政党](#), [民族](#), [民主主義](#) Tagged with [ナショナリズム](#), [マデシ](#), [Kamal Thapa](#), [Oli](#), [愛国心](#)

国連人権理事会で印批判, カマル・タパ副首相

カマル・タパ副首相兼外相が11月4日、ジュネーブ開催の国連人権理事会第23回会議(THE 23RD SESSION OF THE UPR WORKING GROUP, UNHRC)において、ネパール憲法の先進性を訴え、インドの経済封鎖を非難した。



■タパ副首相 UNHRC 演説(11月4日, ネ外務省 FB)

タパ副首相は、高らかに、こう宣言した。「我が国の基本法[憲法]は、多民族、多言語、多文化、地理的多様性を踏まえたものであり、諸個人、諸集団、諸社会のあらゆる権利を守るものである。」(Kathmandu Post, 5 Nov)

したがって、マデシらの憲法非難は、まったくの的外れ。ネパール憲法は、人間の尊厳、アイデンティティ、万人の平等な機会を保障し、ジェンダーについても、積極的是正措置をとるなど、包摂的だ。ネパール憲法には、マデシらの言うような差別や不平等はない。

また、タパ外相によれば、ネパール憲法は内発的なものであり、問題が見つかってでも自国内の努力で平和的に解決できる。

したがって、外国(「インド」とは明示せず)の介入は、「問題を紛糾させるだけ」。ところが、いまネパールは、外国による経済封鎖により「理不尽で深刻な人道危機」にある。「ネパールは、国際法が内陸国に認めている権利と自由の行使を著しく妨害されてきた。」「物流の遮断、通過の遮断は、いかなる口実をもってしても認められない。」(Ibid., 5-6 Nov)

さすが雄弁のカマル・タパ。愛国ナショナリストの本領発揮だ。

ところが、このタパ演説に対し、直接「インド」と名指しされてもいないのに、インド代表が異例の反対演説を行った。「大臣閣下の言及された妨害は、ネパール国内の反対派がネパール国内で行っているものだ。」しかも、ネパール治安部隊は行き過ぎた実力行使により、多くの死傷者さえ出している。

このようなインドの反論は、国際社会の多数意見をバックにしている。スウェーデン、スイス、ベルギーなど人権先進民主主義諸国や、「人権監視」、「アムネスティ」などの人権擁護諸団体は、ネパールにおけるマデシ、タルー、ジャナジャーティ、女性などの差別を糾弾し、治安当局の過剰な実力行使を非難してきた。インドはいま、その国際社会の多数派の側に立ち、「非公式経済封鎖」によるマデシ闘争「非公式支援」を正当化しようとしている。

が、本当に、これでよいのか？ ナショナリズムは、どの国においても恐ろしい。いかに人権や民主主義の正義が名目とはいえ、行き過ぎた外圧はネパール国内に鬱屈した不満を蓄積させていき、いつかは爆発させることになりかねないだろう。



■UNHRC(同 HP)

谷川昌幸(C)

2015/11/06 at 20:16 カテゴリー: [インド](#), [外交](#), [憲法](#), [民族](#), [人権](#) Tagged with [タライ](#), [マデシ](#), [経済封鎖](#), [連邦制](#)

[巨大憲法国の巨大内閣](#)

オリ首相が11月5日、副首相と大臣を追加任命し、首相1、**副首相6**、**大臣19**となった(Himalayan, 6 Nov)。他に大統領1、副大統領1。大臣は19だが、今後まだまだ追加任命されるだろう。巨大憲法(308カ条)と巨大議会(601人)に加え、巨大内閣！

これだけ巨大かつ精緻な世界最高水準の成文憲法を持ち、601人もの国会議員を持ち、首相と首相を支える6人もの副首相と19人の大臣を持ち、さらに大統領と副大統領もいる。ほぼ完璧、万全だ。



■ネパール政府(政府 HP)

西洋諸国, たとえばイギリスは, ネパールに比べれば, はるかに非民主的な後進国。いまだに国教会を持つ宗教国家であり, 国教会の長でもある女王(国王)が君臨する君主国である。憲法は, 古臭いカビの生えたような, 得体のしれない不合理な不文の慣習法。議会上院は, これまた古臭い貴族院であり, 特権貴族の巣窟。



■英国女王行進／英国貴族院(英政府 HP)

西洋には, こんな英国とよく似た古臭い, 封建的な, 遅れた, 非民主的な憲法や政治制度を持つ国が他にもたくさんある。

そうした後進西洋諸国は, いまこそ視察団を編成してネパールに派遣し, その最新にして最高水準の, 民主的な, 世界最大級の巨大憲法と巨大政府を虚心坦懐に学び, そのネパール・モデルに倣い, 自国の民主化を図るべきだ。

西洋諸国は, ユメユメ, 自国の遅れた, 非民主的な文化や制度を, 世界最先進民主憲法国ネパールに押し付けるべきではない。

谷川昌幸(C)

2015/11/06 at 13:08 カテゴリー: [議会](#), [憲法](#), [政治](#), [民主主義](#) Tagged with [Oli](#), [内閣](#)

[ネ大臣の印兵私服派遣発言, 印が嚴重抗議](#)

オリ内閣のサトヤ・ナラヤン・マンデル大臣(無任所, UML)が11月2日, ビラトナガルにおいて, 記者にこう語ったという。(記事により表現は若干異なる。)

「われわれは、インドの召使ではない。いまのところ、インドは軍隊の派遣はできない。が、軍服を着ていない軍隊は着ている軍隊よりも危険だ。」(Online Khabar, 2 Nov)

「インドは軍服の兵をネパールに送り込むことはできないが、私服の兵なら可能性はある。」(ibnlive.com, 3 Nov)

これは重大発言であり、直ちに、インド政府は発言非難声明を出した。

シュリ SN・マンダル発言に関するプレスリリース(在ネ印大使館, 11月3日)[要旨]

ネパールのマンダル大臣が、2015年11月2日のピラトナガルでの記者会見においてインドに言及した。

その発言は、挑発的で、根拠のない悪意に満ちたものである。ネパールの大臣という責任ある立場の人物の発言であり、これにより混乱がさらに拡大し、印ネ関係が悪化しかねない。

印大使館は、この発言を強く非難し、長年の印ネ関係を害するような発言を控えるよう要請する。

インドは、ネパール国民の平和・安定・繁栄を願っている。インドは、これらの目的実現に向け努力しているネパールの政府と国民を一貫して支援してきたし、これからも支援していくであろう。

印ネ関係は、11月2日のネ警官によるインド国民射殺と、このマンダル大臣発言により、急激に悪化した。タイ・マデシュ紛争には、国境付近のインド側住民も多かれ少なかれ関与しているとみるのが自然だ。それだけに、もしオリ内閣が中国カードを利用し反印感情を不用意に刺激すれば、タイの人々をますますインド側に追いやることになってしまうであろう。



【参照】[タイ・マデシュ紛争解決を求める米大使館声明](#)(11月5日)



Statement from the United States Embassy Kathmandu

The United States is deeply concerned by the increasingly volatile situation along the Nepal-India border, resulting in critical shortages of fuel, medicine, and foodstuffs, including in areas still reeling from the devastating earthquakes of April and May.

谷川昌幸(C)

インド国民射殺, ビルガンジ国境付近

11月2日, ビルガンジの印ネ国境付近で, ネパール警察と道路封鎖反政府派が衝突し, 警官の銃撃によりインド青年(24歳大学生?)が死亡した。(他にインド人2名逮捕。) 状況は混乱しており, 射殺されたインド青年がマデシ系反政府活動に参加していたのか, それとも衝突に巻き込まれたのかは, まだはっきりしない。

印ネ国境は解放国境(open border)であり, 印ネ両国民は自由に往来できる。道路封鎖は国境付近で行われており, インド側住民がネパール側のデモに参加していても何ら不思議ではない。むしろ, たんに巻き込まれただけかもしれないが。

いずれにせよ, ネパール警察がインド国民を銃により射殺したことは事実であり, これに対し, インド政府は怒りの声明を発表した。

[インド外務省報道官談話, 11月2日]

報告では, 今日ビルガンジで発砲事件があった。憂慮している。無実のインド国民が射殺された。ネパールの今の問題は本質的に政治的なものであり, 力では解決できない。ネパール政府は, 対立の根底にある諸原因に, 誠実かつ効果的に取り組むべきだ。

インドの輸送業者らは, 国境の先の状況悪化への懸念を今日また表明した。われわれは, 輸送業者らに対し, よく注意し危険を避けるよう警告した。われわれは, 状況を注視している。(印外務省)

これに対し, ネパール政府の反応は, かなり高飛車だ。報道によれば, オリ首相はこのように反論している。

「死者が出たのは遺憾だが, ネパールにおける抗議活動にインド国民が加わるのは憂慮すべきことだ。」「インド国民がマデシの反政府活動を支援するのは, 状況を複雑化させ, 両国関係を阻害するだけだ。」(Republica, 3 Nov)

「そのインド国民は, この地域の安全を守っている警察に投石したので, 警察により撃たれたのです。」(Kathmandu Post, 3 Nov)

オリ首相や他のネパール政府高官が言うように, インド側住民がマデシ系反政府活動に参加していることは十分に考えられるが, だからといってインド国民をネパール領内で射殺すれば, 政治的な大問題になることは, いうまでもない。印ネ関係やマデシ系反政府活動が今後どうなるか, まずは心配になってきた。



■ 国境近くの「インド石油 (IOC)」基地(Google)

谷川昌幸(C)

2015/11/04 at 22:28 カテゴリー: [インド](#), [経済](#), [民族](#) Tagged with [ビルガンジ](#), [マデシ](#), [石油](#), [経済封鎖](#)

中国経由石油, ヒマラヤを越えられるか？

ネパール政府は、石油・ガス不足に対処するため、中国と覚書を交わし、石油類の輸入に着手した。が、北方にはヒマラヤがそびえている。この難所を越えられるのか？

ネパールの石油・ガス不足は、かなり深刻だ。燃料不足で民間車両が少ないため、10月30日から軍用車両4台が出動、カトマンズ8路線を終日無料で市民を運び始めたが、これは焼け石に水。また、プロパン不足のため、半分充填で販売し始めたが、これもボンベ数は倍になっても、早く無くなるので、自転車操業にすぎない。

こうした状況にあって、中国からの石油供与や、それに続く石油輸入は、まさに寒天の慈油。しかし、緊急措置としてはそうであっても、少し長期的に見ると、どうか？ 本当に、うまくいくのだろうか？

一つは、何とんでもヒマラヤ越え。カトマンズから吉隆まで200キロ前後。地震被害部分を応急補修したそうだが、各紙写真を見ると、急峻な悪路を谷底に落ちそうになりながらタンクローリーが登っている。10月31日、12台がラスワガディ国境まで着いたそうだが、この様子では、安定的大量輸送は望めそうにない。運転手も怖がり積載量を大幅に少なくしているそうだ。積雪や凍結もある。

国境からカトマンズ付近までパイプラインを引く計画もあるが、これはすぐには間に合わない。ヒマラヤ越えはいまでも難しい。

もう一つは、それと関連するが、中国経由石油には、当然、インドが戦術的な対抗措置をとる。すでに、インドは石油・ガスの対ネパール輸送を少し増やし、様子を見ている。中国からの石油購入

は、対印圧力としての政治的意味は多少あるにしても、中国内陸輸送・ヒマラヤ越えの経費を考えると、コスト的にインド経由石油には対抗できそうにない。経済的には、中国からの継続的石油輸入は無理ではないか？

おそらく、そうしたこともあってだろうが、マデシ反政府活動は、治まりそうにない。最重要通過点であるネパールガンジ・ラクサウル間の国境付近も、11月1日朝、ネパール警察がデモ隊を排除し、通行可能としたが、インド側タンクローリーがインド側に戻ると、インド治安部隊がすぐデモ隊の再展開を容認したため、再び閉鎖されてしまった。

インド側は、長期的には、中国経由石油をさして脅威と見ていないのではないか？ そもそもネパールの石油・ガス不足は、憲法制定という政治問題に起因している。その解決がなければ、石油・ガス問題の解決も難しいのではないだろうか。



谷川昌幸(C)

2015/11/02 at 19:45 カテゴリー: [インド](#), [経済](#), [憲法](#), [民族](#), [中国](#) Tagged with [石油](#), [経済封鎖](#)

[副大統領にも、マオイスト元ゲリラ選出](#)

10月31日の副大統領選挙で、統一ネパール共産党マオイスト(UCPN-M)のナンダ・キショル(バハドウル)・プンが、第二代副大統領に選出された。マオイスト人民解放軍出身で、ゲリラ名はパサン。

NK・ブン 325 [UML,UCPN-M,RPP-N,MJF-D]

AK・ヤダブ 212 [NC]

* 無効 10, 欠席 47(マデシ系ほか)

NK・ブンは、1965年ロールパ生まれ。マオイスト人民解放戦争に当初から参加、ゴラヒ攻撃(2001)など、多くの戦闘を指揮。人民解放軍副司令官を経て、2008年以降司令官。和平後の人民解放軍解散・国軍統合に尽力。UCPN 常任委員。

2013年第2回制憲議会選挙でカトマンズ第4選挙区から立候補するも、NCのガガン・タパに敗れ、現在、議席なし。反インド的ナショナリストとされている。

NK・ブンは議員ではないので、副大統領候補とすることには反対が強かったが、プラチャンダ UCPN 議長が強力に働きかけ、その結果、UML 推薦, RPP-N,MJF-D 支持を取り付け、大差で勝利した。

これで UCPN は、いずれもマオイスト人民解放軍出身の OG・マガルを連邦議会議長に、NK・ブンを副大統領に就けることに成功した。(副首相の TB・ラヤマジはバブラム・バタライ派とされている。)プラヤンダは、なかなかの策士である。



■NK・ブン FB より

谷川昌幸(C)

2015/11/01 at 15:09 カテゴリー: [マオイスト](#), [政治](#) Tagged with [Nanda Kishor Pun](#), [大統領](#), [人民解放軍](#)
